

遺族代表の言葉

【遺族代表の言葉】 芽吹きとともに巡りくる春、一年で一番美しく穏やかな季節です。しかし、今日ここに集う私たちは、これからずっとこの季節を心の痛みと共に生きる事になりました。今日4月14日、そしてあさって4月16日が訪れるたびに、あの日の惨状が目には浮かび、何よりも愛する家族を失ったあの時を思い出し、深い悲しみの記憶にさいなまれずにはいられません。地震から1年の節目となる今日、このように追悼の場を整えていただきましたことに心から感謝申し上げます。私は1年前、突然の大地震に、着の身着のまま愛犬を連れ、家族3人近くの駐車場で車で避難しました。先に来ていた顔見知りの方に「お婆ちゃんは大丈夫?」、「困ったら言うてよ」と、口々に温かい声をかけてもらいました。心優しい隣人に囲まれた暮らしに感謝したことを思い出します。しかし、16日の2度目の揺れで同じ場所に避難して夜を過ごすうちに、元々寝たきりで弱っていた母の呼吸は浅くなり、夜明けを待って病院へ駆けつけた時には、もう医学の力で母を蘇らせることはできませんでした。火葬場も被災しており、すぐには使えず、1週間の間、母と我が家で心行くまで一緒に過ごせたことは、せめてもの救いでした。私は母を見送り、次第に日々の暮らしが戻って参りますと、悲しみの中ではありますが、少しずつ地震が起きて得たものにも気づき始めました。商品が散乱した店をいち早く片付け、店に来る人に必要な品物を配っていらした方。家の前に「うちは水が出ますのでトイレは自由にお使いください」と立札を立てられた方。「お隣が高齢の方だから水汲みに行ったら、必ず分けてあげるの」とおっしゃる方。皆大変な中で気遣いや手助けを始められ、それを続けていらっしゃる姿が目止まるようになってきました。普段はあまり顔も見たことのないご近所の、そんな心温まる言葉やさりげない援助を知るうちに、感謝の気持ちが芽生え、交流が始まるなど、いくつもの変化が少しずつ私の中に生まれました。悲しく辛い地震でしたが、まわりの人の優しさは、私の生活に希望の花を咲かせてくれました。私は、「花は咲く」という歌が大好きです。大きな災害を体験してあの歌の「花は、花は、花は咲く」というフレーズが胸に迫り、地震の後も変わりなく庭に咲く花を見ると、いのちの営みの退しさと尊さに、生きる力が湧いてきます。私の母は本当に無口で、人生の生き方や教訓めいたことを聞かされた記憶はありません。でも愚痴ひとつこぼさず、黙々と家事をこなす小さな背中が、当たり前の日常のありがたさを、教えてくれていたような気がします。庭の花はまるで母のようで、毎日、私を温かく励ましてくれます。これ迄も、またこれからも、遺族として悲しみが癒えることはありません。それでも多くの人に支えられてここまで来ました。本日の追悼式をきっかけに、私たち遺族が少しでも前を向いて、元気に歩き出すことは、亡くなった方々の望みではないでしょうか。私自身も顔を上げて生きていきたいという思いで、本日、この場に立たせていただきました。悲しみを乗り越え、この辛さを心の糧として立ち上がる人が増えて、熊本が笑顔と活気に溢れるふるさとに再建されていくことを願い、私の挨拶といたします。 遺族代表 富永眞由美